



文学と思想研究会 編

『3・1 運動の文学的再認識』(ソミョン出版、2020年)

문학과사상연구회 편, 『3・1 운동의 문학적 재인식』(소명출판, 2020년)

毎年、韓国文学史の主要作家とテーマを選んで再照明する「文学と思想研究会」の「再照明シリーズ」の一環として出版されたこの本は、2019年3・1運動100周年を迎え、韓国文学の研究者たちが運動の成果を韓国近代文学史の観点から研究した成果物を集めたものである。今まで3・1運動に関する個別の研究成果はあったものの、韓国文学の研究者たちが3・1運動をテーマに、共同研究を行なって単行本を出版したのはこの本が最初である。延世大学の金榮敏教授をはじめとする10人の韓国文学研究者たちの論文が掲載された本書は、3・1運動が韓国の近代文学史に如何なる影響を与えたかを多角的に概観している。3・1運動の影響で創刊された雑誌から詩や小説、そして解放(1945年8月15日)直後に再照明された民族運動としての3・1運動などに至るまで、研究者たちの視角と関心は実に様々である。

第1部は、3・1運動前後に発刊され始めた2つの雑誌を扱った諸論文が収録されている。3・1運動の後、いわゆる、同人誌時代だと呼ばれるほど、同人誌が雨後の筍のように出版されたが、金榮敏は『創造』の読み直し—3・1運動との関係を中心に—で、このような同人誌の中でも『創造』を読み直して3・1運動の歩みが如何に『創造』に投影されたかを明らかにした。『創造』は、当時、他の雑誌では珍しかった純粋芸術や唯美主義志向の文学論に尽力したのだ先入観とは違って、実際にはいわゆる「人生のための芸術」を同時に標榜していたのであり、『創造』を単純に純粋文学的視角からだけで読み取ってはならないと主張している。一方、李鐘護は「青春」が終わった場所、啓蒙と改造の間で—雑誌『三光』を中心に—で、相対的にはあまり知られていない雑誌『三光』を綿密に分析した。3・1運動直前の1919年2月に東京で発刊され始めた『三光』を通じて、彼らが崔南善(최남선)と李光洙(이광수)を中心に—した『青春』とは違う論理を如何に構築しようとしたか、ひいては3・1運動の前夜に出版されたこの雑誌が、その運動が目指していた理念を具現するために、社会的・政治的実践を含意した改造と解放の言説(discours)に基づいた文学と芸術をどのように目指したかを明らかにした。

第2部の3本の論文は、各自が違う読み方で廉想涉(염상섭)の小説『標本室の青蛙』(표본실의 청개구리)を解釈しながら、3・1運動が韓国文学に如何に多彩に投影され得たのかを分析している。まず、金在湧は「欧米近代批判としての『標本室の青蛙』—第1次世界大戦、3・1運動、そして韓国現代文学」で、『標本室の青蛙』を欧米、もしくは、西欧的近代に対する批判として読み取った。国民国家のフレームで文学を解釈するのではなく、グローバルな観点から作品を読みとる時にこそ、新しい解釈の場が開かれるという筆者のいつもの観点もよく表れている。筆者は廉想涉が、この小説の主人公を通じて「非

西欧植民地の理解を盛り込んだ新たなグローバル次元の組織」のようなものについて苦悶したのだとする。一方、韓壽永^{ハンスユン}は「死の家」の記憶—廉想渉『標本室の青蛙』再読」で、この作品を具体的な暴力と拷問の記憶として読み取った。筆者は既存の文学史的解釈に付け加えて、廉想渉が実際経験していたような日帝時期の肉体暴力と拷問の記憶、そして、その後続く「日常としての苦痛」が、この『標本室の青蛙』に生々しく生きていることに注目すべきだと主張した。李賢植^{イヒョンスク}は「3・1運動の文学的記念碑としての『標本室の青蛙』」で、『標本室の青蛙』の真の文学史的価値が一般人にちゃんと知られていない点に注目した。筆者は主人公のような知識人が狂人に転落するしかなかった、まるで解剖を前にした青蛙の身になるしかなかった、3・1運動直後の韓国社会の模様を描いたこの作品を、よく知られているような単なる「韓国最初の自然主義作品」としてではなく、3・1運動の文学的記念碑として読むべきだと主張した。三本の論文は廉想渉の『標本室の青蛙』を各自の観点から読み抜くことにより、究極的に3・1運動とこの作品がいかに関連しているのかを逆説的にむき出しにした。

第3部には詩に関連した諸論文が収録されている。柳成浩^{ユソンホ}は「3・1運動以後の詩史的脈絡」で、3・1運動以降、この事件によって韓国の詩がどのように変わっていったかを詩史的脈絡でまとめた。柳は韓国の詩をいわゆる浪漫主義的傾向の詩、伝統的民謡調に基づいた叙情詩、そして現実主義的志向を強く表した詩などに範疇化して、3・1運動以降の韓国詩壇の変化を幅広く分析した。そのうえで柳は3・1運動は、様々な傾向の詩人たちに、絶筆、隠遁、ジャンル移越、変貌、成長などの多様な過程を経させたことにより、韓国近代詩の展開と拡張に大きな役割を与えたと結論付けた。金信貞^{キムシンジョン}は「3・1記念詩歌の受用方式と象徴性—1920～1930年代の海外韓人メディアを対象に」で、検閲と統制体制の下で3・1運動がまともに進展しにくかった国内事情に比べると相対的に自由であった上海版『獨立新聞』および『新韓青年』、『倍達公論』、『新韓民報』、『先鋒』など、中国、アメリカ、ソ連などで発行された韓人メディアにおいて、3・1運動に関連する内容がいかに関わっているかを調査した。金は当時の海外同胞たちが時調、歌詞、唱歌などの多様な歌の形式を通じて、3・1運動をいかに記憶し、また象徴化しようとしていたかを綿密に分析した。

第4部には、解放以降の3・1運動についての記憶、もしくは3・1運動がいかに関連化されているかという問題を扱った諸論文が収録されている。3・1運動は解放後になってようやくタブーから解かれた事件となった。したがって、解放直後に発表され始めた3・1運動に関連する文学作品の様相がいかなるものであったかを探ってみるのは、単に後日譚についての検討ではない。解放と同時に3・1運動精神の具現化がようやく本格化されたと言えるだろう。まず、梁文奎^{ヤムンギョ}は「3・1運動の形象化から見た解放直後の左派の現実認識」において、解放直後に発表された金南天^{キムナムチヨン}と咸世徳^{ハムセドク}の創作戯曲作品から、3・1運動当時の左派運動の勢力がいかに関連化されていたかを分析した。梁によれば、金南天と咸世徳は3・1運動当時の広範な民衆の連帯についての左派知識人たちの奥深い認識までは描くことができなくて、これを通じて解放直後の進歩陣営の作家たちの皮相的な現実認識までも迂回的に確認することができたと言った。李京洙^{イギョンス}は「解放期の詩に刻まれた3・1運動の記憶」で、解放直後の朝鮮文学作家同盟で出版された『三一記念詩集』を綿密に分析することで、3・1運動が当時いかに文学的に表象されたかを細かく把握した。梁はこの詩集を通じて、新しい国家建設の夢と希望が投影されていたことを確認するとともに、階級性よりは人民性が強調される余り、一つにまとまった声ではなく亀裂した姿も見せたと評価した。

チェヒョンシク ユグァンスン
 崔賢植は「柳寛順（유관순）を呼名するいくつかの視線と声」で、柳寛順烈士が、解放以後どのように3・1運動を象徴する人物になっていったかを実証的に追跡した。崔は長らくわれわれ韓国国民にとって神話のように存在していた「柳寛順ヌナ（お姉さん）あるいは烈士」がどのように作られ、誕生したかを明らかにした。もちろん、柳寛順の殉国は賞讃と尊敬の対象でなければならないが、彼女に対する英雄化の作業は果たして、彼女が行った行動のように純粹であったのか。このような疑問を抱いた崔は、解放直後から相当な期間に亘って柳寛順を意図的に英雄化する営みを先頭に立って進めた人たちの実体を暴くことによって、3・1運動の現在化に絡み合った複雑な課題をむき出しにしようとした。

巻末付録として掲載されたチェコの韓国学研究者のズデンカ・クレスロバ（Zdenka Klöslová, 1935年～）の「ロシアのチェコスロバキア軍団の新聞『チェコスロバキア・デニック（Československý Denník, チェコスロバキア日報）』から見た韓国ニュース（1919～1920年）」は、3・1運動が当時のチェコでどのように報道されていたかを分析したものである。彼女は1919年から1920年までの『チェコスロバキア・デニック』に掲載された韓国関連の記事を整理したが、この新聞に掲載された3・1運動関連の記事は、3・1運動が決して朝鮮半島内のみでの事件ではなかったことを立証する象徴でもあった。

3・1運動が起きてから100年が過ぎた現在、この運動を単に成功と失敗の二分法で判断するのは正しくない。むしろ、運動の展開過程とその余波を分析し、この事件がそれ以後の韓国民族の生を変えていった過程を探ってみる繊細な読みが求められる。文学と思想研究会がこのたび『3・1運動の文学的再認識』を出版したのも、このような意図からである。本書は3・1運動を通してその後の韓国の歴史と韓国民族の生がいかに変わっていったのかを文学史を通じて、多様なアプローチから分析を試みたものである。



キムウンギョ
金應教 著

『33 回の出会い—白石と東柱』(アカネット、2020 年)

김응교 저, 『서른세 번의 만남, 백석과 동주』(아카넷, 2020 년)

本書の著者である金應教は詩人で文学評論家でもある。東京外国語大学と東京大学大学院で比較文学を研究し、早稲田大学の客員教授として任用されて10年間に亘り講義を担当した経験がある著者は現在、^{スンミョン}淑明女子大学校基礎教養大学教授と^{シンドンヨブ}申東曄(신동엽)学会会長を勤めている。著者はこれまで詩人の^{ユンドンジュ}尹東柱(윤동주)に関する本である『チョロム(のように)一詩で出会う尹東柱』と『木がある—尹東柱の散文の森から』という2冊の本を出版したのであるが、このたびは尹東柱を扱った3冊目の本として、尹東柱(1917～1945年)に対する詩人の白石(^{ベクソク}백석, 1912～1996年)の影響関係を探索することを目的とした『三十三回の出会い—白石と東柱』を出版した。

白石は、日本では尹東柱に比べるとさほど知られていないが、この二人の詩人は韓国の現代詩史において欠かすことのできない重要な詩人である。二人の詩人の詩を語ることは、すなわち、韓国現代詩史のひとつのルーツを語ることでもあるが、このような白石と尹東柱の間柄を物語ってくれる白石の詩集『鹿(사슴)』がある。尹東柱は1937年に図書館で白石の詩集である『鹿』を原稿紙に丁寧に筆写し、その詩を何度も何度も読み直して、その筆写本に赤い色鉛筆で自分の感想をメモした。果たして、尹東柱は白石の詩から何を学んだのだろうか。『鹿』には33篇の詩が掲載されているが、著者は、尹東柱が33篇の詩に導かれて33回にわたり白石と出会ったことになると言う。著者はこの33回の出会いの軌跡を追いかけて、33章で構成された今回の著書を出版したが、この33本の文章は学術論文というよりは一般読者のために書いたエッセーであると言えよう。著者は^{ピョンアンド}平安道の出身であり満州を放浪した白石と、^{ハムギョンド}咸鏡道出身の祖先の移住先の満州で生まれた尹東柱の故郷の物語から筆を起し(第1部「子どもの頃の記憶と故郷」‘아릿적 기억과 고향’)、玄界灘を渡った日本の留学時代(第2部「玄界灘を渡って」‘현해탄 건너’)、続いて満州に繋がる行路(第3部「善良な人たち、ディアスポラ」‘어진 사람들, 디아스포라’)を追いながら、二人の詩人の足跡をたどっていく。

第1部「子どもの頃の記憶と故郷」では、故郷に対する愛情に満ちた意識とそれに関する宇宙的想像力について語る。まず、著者は白石の詩「青柿(청시)」(「星空が多い夜/^{ハニバラム}西風が吹いて/青柿が落ちる/犬が吠える」(全文))に注目する。尹東柱は白石の「青柿」を筆写しながら「犬が吠える」の文の最後に「結句で作品を活かした」と赤い色鉛筆でメモをした。著者は「犬が吠える」という句節に注目し、もしこの句節がなかったら、この詩は新た甦ることはできなかったとする。「星の夜に→^{ハニバラム}西風吹くと→風に揺らいた青柿が落ち→柿が落ちる音に犬が驚いて吠え出す」という連鎖現象は、宇宙の小さな世界が動いたら、また違う小さな世界が連鎖的に反応する情動現象が起こるからである。このように白石の詩の「青柿」には宇宙的想像力が充満している。尹東柱は白石の詩に表れる宇宙的動き、宇宙的和合、宇宙的情動に共感し「青柿」を筆写してから4年後の1941年に、「星を数える夜(별 헤는 밤)」を書き

下ろした。この詩では星、空、月などの宇宙的象徴とイメージがたくさん登場するが、著者は二つの詩を比較分析しながら星と宇宙と人間が一つになった宇宙的つながりを読み取る。このようなつながりは、特に白石の詩の中でシャーマニズムの世界とそれによる神秘に溢れていて、時には懐かしく、時には怖い故郷の風景として現れるが、「カジュラン家 (가즈랑집)」「狐谷族 (여우단곡족)」「村中が幽霊になって (마을은 맨친 구신이 돼서)」などの詩にこのような情緒がよく表れている。

白石にとって故郷の懐かしさは頹落した歴史の痕跡としても現れる。日本に留学してきた白石は、過去の朝鮮時代に、北方辺境に対する差別に抗って発生した洪景來 (홍경래) の乱の最後の激戦地であった定州城に寄った。長い歳月を経て崩れてしまった定州城を題材にした詩である「定州城」(1935)を通じて、彼は故郷の定州の辺境情緒を憐憫の気持ちで描いた。この「定州城」の影響を直接受けたとは言いが、尹東柱は豆満江を渡って北間島までやって来た祖先の物語を描いた童詩「故郷の家—満州から歌った」(1936年)を書いた。こんな詩である。「古いわらじを引きずって / 私、何故ここに来たのか / 豆満江を渡って / 寂しいこの地に / 南の空の下には / 暖かい私の故郷 / 私のお母さんがいるところ / 懐かしい故郷の家」。平壤の崇實中学時代に書いたこの詩で、尹東柱にとっての「暖かい南」はどこであったのか。著者はそこが親密な内面の故郷である咸鏡道ではないかと推測している。二人の詩人は絶え間なく平安道の定州と咸鏡道の方言を甦らせ、失われた共同体を詩で復元しようとした。白石にとって平安道の定州は、そして東柱にとって満州の明東村や咸鏡道は、単に敗北した辺境ではなかった。二人の詩人は、辺境の哀れを乗り越える「コムニタス (communitas)」を平安道や咸鏡道の方言を通じて甦らせた。その「辺境のコムニタス」から崩れ落ちたもの、卑しいもの、使い物にならないもの、死んでいくものに対する憐憫の気持ちを自分のものにしたと著者は言う。

第2部「玄界灘を渡って」では、主に白石の日本留学時代の歩みを追いながら、日本紀行の詩を通じて白石がどのようなやり方で私たちに詩的幻想を与えているかを物語っている。白石が日本で書いた随筆である「海濱手帖」と、詩「柿崎の海 (柿崎의 바다)」「伊豆国湊街道」などは、すべて伊豆半島を背景にしている。伊豆半島は白石が住んでいた吉祥寺や青山学院がある渋谷から交通が便利な観光地である。著者は伊豆半島というなじみのない土地の地名を持つ幻想性に注目すべきだと言う。三編すべての題名に日本語の地名を使い、題名で読者をときめかせながら、行けもしないなじみのない地名の題名の前で読者をためらわせるのだと言うのである。また、この三編すべてにおいて平安道の方言が大事な役割を果たしている。平安道の方言を使うことで、平安道という情緒を喚起し、詩人の身は日本にいますが、その魂は過去の自身が経験した共同体 (communitas) の中であったという事実を表出する方式を見せてくれるのである。このように見ると、白石の日本を素材とする詩と随筆は「日本的なもの」というよりは、むしろ「朝鮮的なもの」をさらけ出していると著者は言う。

韓国人たちのことは、よく「白衣民族」と言われるが、白石の朝鮮的ものは「白色」のイメージにも現れる。白石の詩の「白い夜 (흰 밤)」や「私とナターシャと白いロバ (나와 나타샤와 흰 당나귀)」「白い壁があつて (흰 바람벽이 있어)」「南新義州柳洞朴時逢方 (남신의주유동박시봉방)」などに見られる白い夜、白いロバ、白い壁、白い雲、白い雪が積もったカルメナム (チョウセンクロシバラ) などのような白いイメージはファンタジへの入って行く幻想の色彩でもあるが、朝鮮的な共同体の象徴でもある。このような白色イメージは「悲しい一族 (슬픈 족속)」「夜明けが来るまで (새벽이 올 때까지)」「病院

で(병원에서)」などの尹東柱の詩にもよく現れるが、特に尹東柱は白石よりストレートに白色を白衣民族のイメージと関連づけたと著者は言う。

第3部の「善良な人たち、ディアスポラ」では、日本留学を終えた二人の詩人の満州における歷程と創氏改名の問題を扱っている。1940年代に当時の満州国の首都であった新京(現在の長春)は政治、文化、行政の中心地であった。著者によれば、白石は1940年1～2月に新京に行き、3月頃から満州国國務院經濟部の官僚生活を始めたが、創氏改名の問題等で9月頃に辞職することになった。そして、この頃、白石より五歳年下だった尹東柱は延禧専門(現在の延世大学校)を卒業し、日本への留学を準備していた。著者は、白石が新京に到着してすぐに3月から勤務した満州国經濟部の建物や、白石が住んでいた東三馬路と西七馬路などの街を踏査し、満州時代に白石が『満鮮日報』に発表した散文である「朝鮮人と饒舌(조선인과 요설)」について語る。この散文において白石は西七馬路に住んでいる朝鮮人の態度を批判した。彼が住んでいた東三馬路に住んでいた庶民や貧民ではなく、向かい側の西七馬路に住んでいた黄金持ちや一部の朝鮮人に内在している「満州ユトピアニズム(utopianism)」幻想を指摘したのであった。

著者は二人の詩人の創氏改名問題についても論ずる。創氏改名に関わることで満州国國務院經濟部の官僚生活を辞めて新京で失業者になった白石が、創氏改名をしたはずがないとするのが一般的な評価だった。しかし、雑誌の『大東亜』1943年3月号に掲載された文人創氏録を見ると「白村夔行(白石の本名である白夔行に「村」の字を入れた姓名。ちなみに、筆名の白石の「石」の字は彼が尊敬していた日本の詩人の石川啄木の名前からとった)」という白石の創氏名が目につく。しかし、この名簿以外ではどこにも白石の創氏名を見つけることはできず、また、白石がこの創氏名で作品を発表したことはない点に注目すべきだと著者は言う。白石の場合と比べると、尹東柱の創氏改名は、日帝に強いられ創氏改名に屈服した自分のことを懺悔した詩「懺悔録(참회록)」を通してよく知られている。著者は尹東柱が1942年に日本の留学するため仕方なく「平沼東柱(ひらぬまとうちゅう)」に創氏改名をした後、その悲しくも悲惨な気持ちを「懺悔録」に込めた尹東柱の心情を強調して紹介している。

以上のように金應教の著書『33回の出会い、白石と東柱』を一瞥してみると、全33本の文章のうち尹東柱に対する白石の影響関係を扱った文は、1/3の12本だけであった。そして、他の文章の中では、白石だけを扱ったものが17本、また尹東柱だけを扱ったものが4本であるため、本書では筆者の意図が達成できたとは言い難い。しかし、二人の詩人が共有していた北方情緒や故郷意識、そして日本留学の経験を考えると、この二人の詩人の詩的歷程をひとつにまとめて探求してみることにさほど問題はないと思われる。韓国と日本、そして満州の詩的現場を直接訪問し、豊富な原資料に基づいて書き上げられたこの著書は、単なる学術論文とは違う価値を持っていると考えられる。

著者は次のような言葉で本の最後を締め括った。

「白石と尹東柱の詩を読むことができるこの国は美しくて強靱です。白石と尹東柱の詩を愛する読者たちがいるから、この国は暖かいのです」と。

[日本語訳：申東洙]